学生相談研究, 2008, 28, 238－245

展　望

学生相談に関する近年の研究動向
― 2005年度の文献レビュー ―

髙橋紀子（京都文教大学）

本論文は2005年度に我が国で発表された学生相談に関する文献レビューを行い、学生相談に関する近年の研究動向を展望することを目的とした。

そこで、収集した文献を学生相談機能別に分類し、それぞれの内容を整理した。その結果、学生相談の研究は来談学生への援助を中軸としながら、全般的な学生理解へ貢献しようとする現状が明らかになった。また学生相談研究では、事例研究での量的データの複合、および主訴といった質的情報の量的データ化といった独自の研究方法が工夫されていることが明らかになった。

キーワード：学生相談、文献レビュー

1　はじめに

日本学生相談学会機関誌『学生相談研究』では、1998年度以降の学生相談に関する研究について年度毎の研究動向を展望している。1998～2000年度を道又（2001）、2001年度を太田（2003）、2002年度を小林（2004）、2003年度を實藤（2005）、2004年度を三戸（2005）がそれぞれ考察した。本稿はこれらの流れを受け、2005年度に発表された学生相談に関する研究論文をレビューし、近年の学生相談における関心事や今後の課題となっている事柄について整理することを目的とする。

2　方　法

（1）対象文献

対象とした論文は学会誌、各学生相談機関発行の紀要･報告書である。文献は論文に限定し、エッセイや活動報告については対象外とした。

（2）分類軸の設定

収集した文献は、吉武（2004）の提示した学生相談室の機能5軸モデル（①修学・学生生活支援、②進路・キャリア形成支援、③心理・発達援助、④ハラスメント／トラブル・危機対応、⑤キャンパスワーク（予防活動））を参考に設定し分類した。項目ごとの研究はKJ法の手法を用いて内容別に整理した。設定した学生相談室の機能項目は以下のとおりである。

①運　営

学生相談機関を対象事例とする研究。開設等のハード面および相談における学内外の連携・協働等のソフト面両方を含む。

②予防・心理教育

予防教育活動としての講義およびグループワーク。

③進路・キャリア

進路相談やキャリア形成に関する実践および調査研究。

④心理・発達援助

クライエントの理解、対応、連携。セラピストを対象とした心理援助。

⑤危機介入

危機対応およびハラスメント問題への取り扱い。

⑥学生理解

大学生全般への理解。ライフサイクル、対人関係、およびメンタルヘルスや学生生活のQOL。

3　結　果

まず、上述の学生相談室の機能項目への分類結果を**表1**に示す。

続いて各項目に分類された研究の内容による分類結果を述べる。また項目によって採用される研究方法に特徴がみられたため、合わせて記述する。

(1) 運　営

1）内容の分類

「運営」に分類した研究は、その内容により「運営事例」「傾向分析」「他国との比較」の3つに分類された。「運営事例」とは、自らが関わる学生相談機関での体制確立の経過を事例的に振り返るものである。中間（2005）は医学部学生への支援の必要性との関連から学生相談室開室の経過を述べた。「傾向分析」には、学生相談室来談者のひきこもりと不本意就学の学生の比率を分析する研究（高石，2005）と、学生の被援助志向と相談機関の名称の関連を調査する研究（木村，2005）があった。また、外国の学生支援体制を報告する論文（齋藤他，2005）を「他国との比較」とした。

2）研究方法

運営に関わる研究では、原則的に学校や学生相談室といった組織やその利用者が研究対象となる。そのため、他項目に比べ学校風土や学科の特徴といった学校の固有性を踏まえた考察が多くみられた。また、木村（2005）の学生の志向性を学生相談室の枠組みとの関連を検討する視点や、高石（2005）による学生相談室スタッフの評定を元に来談者の質的情報を数量化し分析する方法など、学生相談室が既に有する情報を新たな視点を入れることで分析の素材として活用する試みがみられた。

(2) 予防・心理教育

1）内容の分類

予防・心理教育に関する研究は、形態別に「講義」と「グループワーク」に分類した。「講義」はその内容により、性教育（阪井，2006;早坂ら，2005)、学生支援（池田，2005;森田ら，2006)、障害学生支援(大西ら，2006)の3つにわかれた。「グループワーク」は、その活動内容と効果を検討する研究が中心であったが、グループワークと個別支援の相補作用を検討する研究（井利，2005）もあった。

2）研究方法

予防・心理教育の研究では、学生の感想アンケートや意識調査といった量的データを示しながら、実施した支援に対する効果を分析する手法が多く用いられた。非履修学生を対照群として用いた効果測定も報告され、効果の妥当性を数量化で裏付ける傾向がみられた。

表1　学生相談室の機能項目と研究分類の内訳

	分類項目			研究の概要
1	運営	運営事例		医学部学生の支援と学生相談室の開設（中間，2005）
		傾向分析		学相利用者のひきこもり不本意就学該当率（高石，2005） 機関名称と被援助志向の関係（木村，2005）
		他国との比較		イギリスの学生支援体制（齋藤他，2005）
2	予防・心理教育	講義	性教育	性教育指針（早坂他，2005） 成果と課題（阪井，2006）
			学生生活支援	予防教育（池田，2005） 障害学生支援（大西他，2006）
			講師の属性	学生相談担当教員による講義（福留他，2005）
		グループワーク		個別面接との相補的補助（井利，2005） 茶湯（友久，2005） 人間関係の促進（有沢，2005）
		予防		講義・研究活動時の事故による訴訟事例（日山他，2006）
3	進路・キャリア	大学生		女子新入生のキャリア志向（倉石，2005） 女性のキャリアと役割葛藤（佐々木，2005） 進路選択決定過程（安住，2005） 進路選択過程に対する自己効力阻害要因（楠奥，2005）
		大学院生		修学相談（福留，2005）
4	心理・発達援助	個別相談		対象喪失（加藤，2006）、行動化（大伸，2005）
		学生相談の特性		卒業後の受け皿（浅原，2005） 入学期と卒業期の中断と終結（渡部，2005）
		保護者との連携		不登校（坂田，2005）
		スーパーバイズ		セラピスト・フォーカシング（吉良他，2005）
5	危機介入			教師へのコンサルテーション（保科，2005） 外国人留学生（外ノ池，2006）
6	学生理解	全般		学生生活サイクルにおける諸問題（菊池，2005） 学生相談における語り（西村，2005）
		学生生活サイクル	新入生	うつ状態（黒崎他，2006） 体重変動と生理不順（直島他，2005） 会話の場としての学生相談室の活用（中村，2005）
			院生	博士課程（道又，2005）
		恋愛		恋愛解消とストーカー被害（宮村，2005） 恋愛のタイプ（大石他，2005）
		メンタルヘルス・QOL		QOL（堀井，2005） 精神医学的チェックリストの変化（岡他，2006） メンタルヘルスイメージ（岡本他，2006） 新キャンパス移行と学生生活（田中他，2005）

(3) 進路・キャリア

1) 内容の分類

対象により「大学生」と「大学院生」に分類した。

2) 研究方法

進学就職状況や学生の意識調査の結果を分析する研究が中心となる中、来談学生の主訴をカテゴリー別に分類し量的データに変換することで、学年ごとの特徴や変化を縦断的に検討する研究（安住，2005）もあった。

(4) 心理・発達援助

1) 内容の分類

来談学生の内的世界およびその変化のプロセスに焦点づけたものを「個別相談」とし、個別事例から学生相談の特性について焦点づけ考察された研究を「学生相談の特性」として分類した。個別相談には、母子関係の修復を扱ったもの（加藤，2005）と、行動化を扱ったもの（大仲，2005）があった。学生相談の特性には、卒業後の受け皿について考察したもの（浅原，2005）、入学期と卒業期の中断と終結を扱ったもの（渡部，2005）がみられた。また、保護者との連携について論じたものを「保護者との連携」（坂田，2005）、セラピストが臨床の過程を振り返る部分に焦点をあてたものを「スーパーバイズ」（吉良他，2005）とした。

2) 研究方法

個別相談の事例研究が中心であった。

(5) 危機介入

1) 内容の分類

該当する研究は、教師へのコンサルテーションに焦点をあてて論じた研究（保科，2005）と、外国人留学生への対応事例（外ノ池，2006）であった。

2) 研究方法

事例研究であった。

(6) 学生理解

1) 内容の分類

「学生理解」には、一般大学生・院生を対象に行った研究を中心に分類した。全般的な学生理解を扱ったものは、学生生活サイクルを対象とした菊池（2005）の論文、学生相談における語りを対象とした西村（2005）があった。学年別、もしくは特定の学年の固有性に注目して検討した研究を「学生生活サイクル」、学生の恋愛傾向に関するものを「恋愛」、学生の心身の健康や充実感に関するものを「メンタルヘルス・QOL」と分類した。学生生活サイクルでは、新入生を扱ったもの（黒崎他，2006；直島他，2005；中村，2005）と、大学院生を扱ったもの（道又，2005）があった。恋愛では、ストーカー被害（宮村，2005）、恋愛のタイプ（大石他，2005）があり、メンタルヘルス・QOLでは、QOLを扱った堀井（2005）、UPIを扱った岡他（2006）、メンタルヘルスイメージ（岡本他，2006）、新キャンパス移行と学生生活（田中他，2005）といった論文がみられた。

2) 研究方法

講義中に質問紙を配布する調査研究のほか、入学時に全学生を対象に実施する調査結果の分析がみられた。また学年ごとの主訴の分類による学年ごとの検討も行われた。

4 考 察

(1) 傾 向

まず、項目別の研究本数としては「学生理解」が最も多く、「心理・発達援助」と続く。今回収集できていない論文がある可能性を考えると、単純に本数のみで傾向の分析を行うことは早計であるおそれがあるものの、この結果は、近年の学生相談が相談支援を中軸としながら、全般的な学生理解へ貢献しようとする現状を表しているように思う。また、本数が最も少なかったのは「危機介入」であった。学生相談の研究には、日々の業務

から多くの知見が蓄積されつつある領域と、少ない事例を少しずつでも共有していく必要の高い領域があることが窺える。

なお内容別にみると、基本的傾向としては2004年度と引き続き、連携や協同の重要性を指摘する研究が多い点があげられる。項目別では「運営」では主に教職員と、「心理・発達援助」では保護者との連携の記述がみられた。これらのネットワーク形成については、個別のやりとりが具体的に記述される傾向があった。このことから教職員や保護者との連携は、個別相談や日々の業務を通して、ひとつひとつ実態を作った後、徐々に組織化される流れがあるようである。なお今年度は学内の教職員や保護者といった人的支援の連携のみならず、特定の学生が個別相談とグループ支援といった複数の支援を利用する事例も発表された。ひとりの学生を複数の支援体制で支える試みは年々増えているようである。

また「運営」に関しては、常勤相談員の活動を主軸とする研究に限られ、非常勤相談員だけで運営される学生相談室の事例は発表されていない。これは常勤相談員の役割のひとつに学生相談室を運営する力が求められていることを意味すると思う。実際は非常勤相談員だけで運営される学生相談室も多いであろう。常勤相談員だからできる仕事があると同時に非常勤相談員だからこそ担える役割もあると思う。今後、非常勤相談員で構成される学生相談室の利点や運営上の工夫に関する研究の発表も待たれる。

（2）学生相談の研究方法
ー学生の声を聴く姿勢と教職員に伝える工夫ー

グループ活動や教育など複数の学生を対象に行う領域では、参加した学生へのアンケート結果の分析が支援の効果の指標として用いられることが多かった。学生からのフィードバックを考慮する研究と共に、事前に学生に意識やニーズを尋ねる調査もみられた。2004年度のレビューにおいて、学生の生の声を聴こうと試みる調査研究の相対的少なさが印象として挙がったが、これに関しては1年ずいぶんと変化があったようである。

なお研究方法では、従来の事例研究や調査研究だけでなく、事例研究の中に量的データも合わせて提示する研究が増加傾向にある。また、主訴といった質的情報を、カテゴリー別に分類することで量的データに変換し分析する手法は、「運営」「進路・キャリア」「学生理解」と複数の項目にわたってみられた。主訴を量的データに変換する手法は、学生相談研究において定着しつつあるようである。この傾向は、学生相談研究が、来談があるかないかではなく、“どのような”来談者が多いかについて、守秘義務を維持しながらより実際の様子を数量化により提示する工夫が重ねられているあらわれといえよう。こうした研究方法の工夫は、学生相談の報告書や紀要が学内の教職員を読み手とする特性とも関係するように思う。報告書や紀要の発行及び配布そのものが、近年重視される学内連携の道具もしくはきっかけとしての役割を果たすことを期待されており、その報告書や紀要の役割が学生相談研究の方法に影響を与えているのではないだろうか。個別の事例と同時に客観的なデータを提示したり、質的情報を数量化することにより、普段心理臨床学に馴染みのない教職員も、その研究をより客観的で説得力のある資料として理解することができるであろう。学生相談の研究者にとって、本質を損なわずに客観性の高いデータを提示する工夫は、研究の展開としてだけなく、より臨床活動と直結したものとして認識されている印象を受けた。そして今後も連携や協働のための工夫が、学生相談研究の発展の原動力となるように思う。

（3）今後の展開

2005年度の研究動向を踏まえ、今後の研究の

展開として、最後に①教職員の意見の抽出、②地域貢献の２点を挙げる。

今回、教職員との連携や協働の重要性を述べる論文は多いものの、実際に教職員の声を調査した研究はみられなかった。学生の声を聴く研究姿勢が定着しつつある今、その姿勢を教職員に向ける時がきていると感じる。

次に、連携・協働のキーワードは今後、学内を越えて学外の機関との連携、もしくは地域コミュニティのひとつとしての学生相談室の役割に展開するであろう。個別相談の中では、既に卒業後の学生の支援などで学外の機関と連携することも日常的に行われているようである。今後はそうした個別のつながりから、学生相談室の組織全体としての地域の中での位置づけや機能に関する研究が行われるのではないかと思う。

付　記

今回、学生相談の動向を概観する得がたい機会を与えてくださいました名古屋大学学生相談総合センターの鶴田和美先生、および甲南大学学生相談室の高石恭子先生に心より感謝申し上げます。また、資料の収集にご協力くださいました濱木美津子さんをはじめ、京都文教大学学生相談室の皆様に厚く御礼申し上げます。

文　献

浅原知恵　2005　学生相談における「教育的・支持的関わり」の終結．学生相談研究，26(1), 13-23.

安住伸子　2005　大学生の進路選択決定過程に関する一考察．神戸女学院大学カウンセリングルーム紀要，11, 39-44.

有沢孝治　2005　学生相談における人間関係の促進を目指したグループワークの検討．学生相談研究，26(2), 125-137.

早坂真貴子・山口一郎・新井猛浩　2005　大学生の実態に即した性教育指針のあり方．山形大学保健管理センター紀要，4, 7-14.

日山亨・川本仁・黒崎充勇・岡本百合・吉原正治　2006　大学における授業・研究活動に伴う事故の防止に向けて．総合保健科学：広島大学保健管理センター研究論文集，22, 41-47.

福留留美　2005　大学院生の修学相談から見た諸問題と対応―他大学卒院生と本学卒院生の比較を中心に―．学生相談（九州大学学生生活・修学相談室紀要），7, 21-27.

福留留美・吉良安之・田中健夫　2005　学生相談担当教員による全学教育授業に関する検討（2）―履修状況と授業評価から―．学生相談（九州大学学生生活・修学相談室紀要），7, 47-53.

保科公彦　2005　教師へのコンサルテーション活動に着目したスクールカウンセラーの危機介入過程．山梨英和大学カウンセリングセンター紀要，2, 3-10.

堀井俊章　2005　大学生のQOLに関する基礎研究（続報）．山形大学保健管理センター紀要，4, 44-54.

池田忠義・吉竹清實　2005　予防教育としての講義「学生生活概論」の実践とその意義．学生相談研究，26(1), 1-12.

井利由利　2005　対人不安に対する個人面接とグループ活動の相補的援助について．学生相談研究，26(1), 38-49.

加藤真由美　2005　度重なる対象喪失体験からの回復の過程で母との関係の修復を試みた女子学生の面接．学生相談研究，26(2), 103-114.

菊池一江　2005　学生生活サイクルからみた大学生の諸問題．山形大学保健管理センター紀要，4, 55-59.

木村真人　2005　学生相談機関の名称と被援助志向性との関連について．東京成徳大学研究

紀要，12, 11-17.

吉良安之・兒山志保美　2005　セラピスト体験の自己吟味過程－セラピスト・フォーカシングの1セッション－．学生相談（九州大学学生生活・修学相談室紀要），7, 55-65.

楠奥繁則　2005　大学生の進路選択における自己効力阻害要因に関する一考察．立命館経営学，44(2), 105-123.

倉石哲也　2005　女子大学入学生のキャリア志向と学生相談センター．武庫川女子大学学生相談センター紀要，15, 27-38.

小林孝雄　2004　学生相談に関する近年の研究動向－2002年度の文献レビュー－．学生相談研究，24(3), 305-315.

黒崎充勇・岡本百合・松山まり子・石原令子・岡田真紀・矢式寿子・杉原美由紀・内野悌司・磯部典子・品川由佳・酒井祥子・川本仁・日山亨・山手紫緒・河内桂子・吉原正治　2006　大学新入生のうつ状態に関するアンケート調査－過去4年間の入学時評価とその転帰についての検討から－．総合保健科学：広島大学保健管理センター研究論文集，22,49-57.

道又紀子　2001　学生相談に関する近年の研究動向－1998～2000年度の文献レビュー－．学生相談研究，22(3), 338-349.

道又紀子　2005　博士課程院生への学生相談活動．東京工業大学保健管理センター年報，32, 147-155.

三戸親子　2005　学生相談に関する近年の研究動向－2004年度の文献レビュー－．学生相談研究，26(2), 138-156.

宮村季浩　2005　大学生における恋愛関係の解消とストーカーによる被害の関係．学生相談研究，26(2), 115-124.

直島厚子・早坂真貴子・遠藤啓子・山口一郎　2005　女子新入生における体重変動と生理不順の影響．山形大学保健管理センター紀要，4, 15-17.

中間裕美子　2005　医学部学生の支援と学生相談開設に関する一考察．山形大学保健管理センター紀要，4, 64-70.

中村良　2005　新入生における「会話の場」としての学生相談の活用に関する一事例．山形大学保健管理センター紀要，4, 27-37.

西村安芸子　2005　学生相談における「語り」．山形大学保健管理センター紀要，4, 18-26.

大石勝代・大石弘　2005　現代大学生における恋愛のタイプについて．山形大学保健管理センター紀要，4, 38-43.

太田裕一　2003　学生相談に関する近年の研究動向－2002年度の文献レビュー－．学生相談研究，23(3), 295-312.

岡伊織・山崖俊子・佐々木由利子　2006　大学生精神医学的チェックリスト（UPI）における津田塾大学生の28年間にわたる変化．学生相談研究，26(3), 233-242.

岡本百合・矢式寿子・黒崎充勇・内野悌司・磯部典子・品川由佳・酒井祥子・川本仁・日山亨・松山まり子・石原令子・岡田真紀・山手紫緒・河内桂子・杉原美由紀・岡村仁・井上正規・吉原正治　2006　大学生はメンタルヘルスに関してどのようなイメージを持っているか？－医療系学生に対する検討－．総合保健科学：広島大学保健管理センター研究論文集，22, 33-39.

大仲重美　2005　「行動化」について－事例から考える「行動化」の意味と「心の教育」の必要性－．武庫川女子大学学生相談センター紀要，15, 53-62.

大西健広・田中芳則・山本幹雄・佐野（藤田）眞理子・吉原正治　2006　総合保健科学：広島大学保健管理センター研究論文集，22, 1-7.

齋藤憲司・野原佳代子・熊谷英男　2005　イギリスの大学における学生支援体制と我が国への

示唆．東京工業大学保健管理センター年報，32, 122-133.
阪井俊文・松山まり子・品川由佳・日山亨・石原令子・岡田真紀・矢式寿子・河内桂子・酒井祥子・長沼貴美・吉原正治　2006　大学における性教育を考える－「恋愛と性の講座」の成果と課題の検討－．広島大学保健管理センター研究論文集，22, 25-32.
佐々木由利子　2005　女性のキャリアと役割葛藤についての大学生の意識．学生相談研究，26(1), 24-37.
坂田裕子　2005　不登校学生が卒業を迎えるまでの心の軌跡－保護者とのコラボレーションを通して－．武庫川女子大学学生相談センター紀要，15, 39-52.
實藤聡子　2005　学生相談に関する近年の研究動向－2003年度の文献レビュー－．学生相談研究，26(1), 62-71.
高石恭子　2005　ひきこもりと不本意就学の学生相談室利用者に占める比率の変化．甲南大学学生相談室紀要，13, 15-27.
田中健夫・吉良安之・福留留美　2005　新キャンパスへの移行と学生生活（その2）．学生相談（九州大学学生生活・修学相談室紀要），7, 28-39.
友久茂子　2005　グループワークとしての茶湯－学生相談室での試み－．甲南大学学生相談室紀要，13, 28-37.
外ノ池裕美　2006　学生相談における外国人留学生への危機介入．学生相談研究，26(3), 209-220.
渡部未沙　2005　学生相談における中断と終結をめぐる一考察．学生相談研究，26(2), 93-102.

Recent Trends in the Studies on Student Counseling Published in the 2005 School Year.

Noriko TAKAHASHI（*Kyoto Bunkyo University*）

This article reviewed research papers in the area of student counseling that were published in the 2005 school year. The review focuses on the function of student counseling.

The findings revealed that the main aspect with regard to the function of student counseling was personal counseling, as noted in the studies. Further, the original method of research suggested that the function of student counseling journals was to promote the understanding of student counseling in the academic faculties.

Key words: Student counseling, review of articles